

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

第35回 International Society for Traumatic Stress Studies 報告

著者	今野 理恵子
雑誌名	武蔵野大学認知行動療法研究誌
号	1
ページ	41-42
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001212/

■ 学会便り

第 35 回 International Society for Traumatic Stress Studies 報告

客員研究員 今野 理恵子
武蔵野大学認知行動療法研究所

第 35 回インターナショナル・トラウマティック・ストレス学会は、2019 年 11 月 13 日～15 日、マサチューセッツ州ボストンのボストン・マリオット・コープレイ・プレースホテルで開催された。11 月半ばというのに暖かかった日本と違い、零度を観測する日も少なくなかったボストンでは、宿泊するホテルでの開催は大変有難かった。大会テーマは、「Trauma, Recovery, and Resilience: Charting a Course Forward」であった。

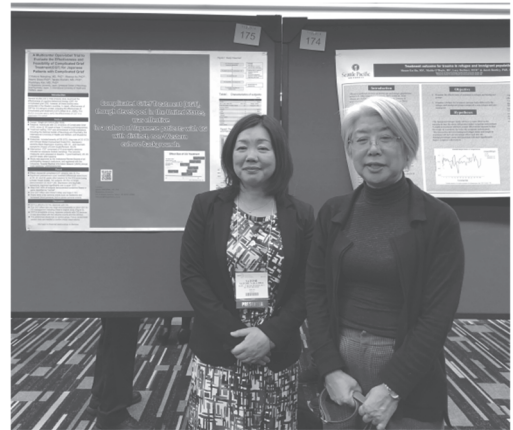
13 日の基調講演は、「心的外傷と回復」の著者としても知らない人はいないジュディス・ハーマン博士の「真実と和解：被害者の視点から正義を思い描く」という演題で行われた。性暴力及び DV の被害者へのインタビューから、被害者が望むのは傷つきの認識であるが、司法が望むのは事実の認識であるという点で大きな差があり、被害者が司法の場でさらに傷ついていること、回復には段階があり、その中でも周りのコミュニティの力が必要であることを述べられた。今後の課題として、レジリエンスのダイナミクスと順応性の研究や問題解決やトレーニングなどへの研究者や治療者の動員とそれにかかる費用の投資などを挙げられていた。

14 日の基調講演は、認知処理療法 (CPT) の開発者であるパトリシア・リーシック博士が、臨床と研究の間に位置する認知処理療法の様々な例について講演した。リーシック博士は、2019 年 3 月に来日され、武蔵野大学においても講演やワークショップが行われ、筆者も直接お話しする機会に恵まれた。その際も、CPT に関する多くの研究の成果を学んだが、今回も、CPT の多様性を模索している数々の臨床研究の知見を得ることができた。CPT の実施場所を変えた研究、セッション数を変えた研究、1 週間～3 週間の集中型 CPT、CPT に加えて睡眠やモチベーションアップのためのセッションなどを加えた研究、マニュアルを送付して行うテキスト CPT といわれる研究が紹介された。その中で、印象に残っているのは、セラピストの研究において「プロトコルに忠実であることが PTSD 症状、否定的認知、うつ症状を減少させる」と示されたことである。様々な形を取っても、CPT の根幹の部分では、プロトコルにいかん忠実であるかが大切ということを改めて肝に銘じた。

今回、多くの講演やシンポジウムで学ぶ際に、大いに役に立ったのが、学会やイベントの情報を得ることができるアプリ「Whova」である。プログラムのスケジュールや抄録が載っており、それ以外に交流サイト、写真も投稿できる。これにより、ホームページからプログラムをダウンロードせずに、アプリの中からスケジュールを確認し、行きたいシンポの内容を見ることができる。自分用にお気に入りのプログラムを作成もできるので、次にどこに行くか一目瞭然で、時間のロ

スもない。今後、日本の学会にも導入されることを期待する。

最後に、今回ポスター発表で感じたことは、アピール力の不足である。ポスター会場にはブラウニーや飲み物が置いてあり、社交場と化していた感もあるが、多くの人たちが会場に足を運んでくれていた中、ほとんど説明できなかったことが悔やまれる。今後、国際学会に参加する場合には、積極的に研究成果を発表していきたい。



左から中島聡美先生、小西聖子先生